

「もとはこちら」のお話し

No.65 今月のテーマ 秋入学と ラーメン屋



正しい自己反省は 不幸を幸福に換える 特効薬

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

入学や就職の晴れやかな季節も一段落し、少し落ち着いた五月となりました。爽やかな五月の風を受けてキラキラと輝く青葉・若葉は本当に清々しく、この季節は目に映るものの全てが希望に満ち溢れているように見えます。街も村も人々も、燃えいずるいのちの季節です。

ところで日本では新年度や新学期は、桜の花が咲く四月というのが慣わしになっています。ところが入学の時期をずらし、秋入学という事を、言い出した大学があります。世界の主だった大学の約七十パーセントが秋入学となっているので、日本でもそれに合わせようというのです。合わせれば外国の優秀な学生が日本の大学に留学して来やすくなり、その結果、日本の大学のレベルが向上するという理由だそうです。

当初、まさかそんな理由で、本気でそんな事を考えているとは思いませんでしたが、どうやらそうでもなさそうです。そしてそんな大学に追随し、他にも真剣に秋入学を検討している大学があるそうで、有識者とかいわれる人達によって、春入学が秋入学に変わることのメリット、デメリットをケンケンガクガク検討しているようです。知の最高学府ともいわれる大学において、もしも本当に真面目にその様に考えているのだとすれば、その様な安直な発想をする事自体が、私には問題だという気がします。それは問題の本質から目を背ける逃げの姿勢であり、それでは問題の根本解決には繋がらないだろうと思います。

疲れている 私達

日本の大学全般のレベルが落ちているのは事実です。数ある外国の有名大学に比べ、日本のそれは年々存在感が薄くなってきており、日本の大学そのものの魅力がなくなってきたのです。ですから外国からの留学生も減ってきていますし、日本から欧米諸国の一流といわれる大学へ行く留学生も、大変少なくなっています。しかしそれは、日本の大学の入学時期が春だからという様な事が原因ではない事は、誰の目にも明らかな筈です。

日本に来る留学生が減っているのは、日本や日本の大学に魅力が無くなってきているからです。また外国への日本人留学生が減っているのは、そこまでして勉強したいという強い意欲が、学生達になくなってきたからです。

北原ゆり筆

はつきり言って日本の子ども達は、学力も体力も、そして気力も落ちてきています。ひと言で言えば元気がないのです。子どもは社会の象徴です。という事は、日本全体が疲れ果て、気力も体力も落ち、元気がないという事です。

残念ながら、日本の大学生の中で本当に真剣に勉強をしているのは、一握りに過ぎないと、よく言われています。それは日本の大学は入学さえしてしまえば、あとは余程の事がない限り卒業できる様になっているからです。そのため子ども達が一番よく勉強するのは、実は大学に入るまでの期間なのです。

人によつては中学・高校に入る以前から、いや、中には幼稚園に入る前から受験のための勉強を強いられ、試験の点数を取る事だけが人生の目的の様になってしまっている子供さえいるのです。夜遅くまで勉強を強いられ、遊ぶ暇も与えられず、試験に合格する為のノウハウを、あの手この手で身に付けさせられていくわけです。

その様にして、とにもかくにも大学生になつた彼らが、それまでの受験地獄の束縛から開放され、アルバイトだ、飲み会だ、合コンだのに明け暮れ、勉強は二の次、三の次になっていくのも、いわば当然の結果だという事が出来ます。そして二年も経てば今度は就活の時期となり、試験だ、面接だということで、またまたじつくりと腰をすえて勉強しようという事にはならないのです。そもそも、彼らにとつては、勉強は楽しいものではなく、苦痛なものになつてしまっているのです。

そんな状態ですから、じつくりと腰をすえて勉強できる筈の、その大学時代の貴重な時間の中でさえも、夢中になつて勉強するといふ様な事もなく、授業以外に自主的に勉強する時間は、平均して週の内たった5時間程度というようになつてしまっているのです。また日本の大学生は一般的な教養を身につけるための読書量も、外国のそれに比べ非常に少ないと言われています。

一握りの本当に高い志を持った学生以外は、ただ、漫然と大学生活を送り、大学に入る目的は大学卒という資格や肩書きを得る事であり、単位さえ取れば後は適当に時間をつぶして遊ぶだけという

様な学生が多いというのが実情です。

本末転倒な解決法

本来、こどもは遊ぶのが仕事です。

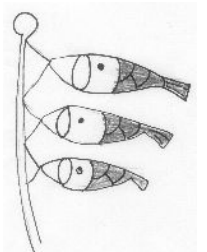
問題は、そういう遊びたい盛りの小さい子供を無理やり押さえ込んで、受験の為のテクニクを教え込み、難関校に入る事ができればそれで後は何とかなるだろうというような一方的な価値観を押し付ける事です。大した目的も無く大学に入つた子供が、勉強に興味もやる気も起こさないのは当然です。だから大学の質も学生の質も低下してしまっているのです。

受験勉強一本やりで、勉強する事の本当の楽しさを味あわせる事もなく、かえつて勉強を苦痛なものにしてしまっている今の受験制度や、親や社会のあり方に根本的な問題があるのです。

ところがその問題に目をつぶり、やる気の無い日本の学生に見切りをつけ、代わりに優秀な外国の学生を呼び込み集め、大学の面目を保とう、レベルアップを図ろうとするなど、本末転倒もよいところです。

日本のそれとは違って、あちらの大学は誰でも比較的簡単に入学できるものの、入学してからが大変だといわれています。卒業する為には高校時代までのそれとは打って変わって、本当に真剣に勉強しなければならず、相当の努力が要求されるといわれています。一般教養のみならず専門書の読書も欠かさず、専門的な知識を身につけるためのすさまじい勉強を彼らは必死でしているのです。

そんな中で、日本の大学も秋入学にしさえすれば、外国から優秀な学生が集まるだろうと考え、優秀な学生が留学してくれば我ら日本の大学のレベルも上がるだろうという様な安直な考え方をする事自体、どうにも不可解です。



苦肉の策のラーメン屋

少し例えが悪いかもしれませんが、まずいものしか提供できず、たいしてやる気のないラーメン屋が、「客が来ないのは開店時間に問題があるからだ」と考え、時間をずらして開店しようとする様なものです。あるいはまた自分のところの味に自信がないラーメン屋が、隣の町の評判の良いラーメンを取り寄せてそのまま客に提供し、「うちの店の格が上がった」と、言っている様なものです。

味の悪さや客あしらいのまずさをそのままにして、いくら開店時間を変えたところで、或いはまたよその店が一生懸命工夫して創り上げたラーメンを取り寄せ、器だけを変えて出すような事しかできない店に、喜んでお客さんが来るとは考えられません。本当に美味しいラーメンがあり、魅力的なお店であると分かれば、お客さんというのは少々遠い所からでもやって来るものです。その証拠に私の町のある小さなラーメン屋さんは、開店前から長い行列ができ、日曜祭日ともなれば全国各地から押し寄せるお客さんで大盛況です。

ラーメンと大学を同じに論じるわけには行かないでしょうが、ものごとの本質においては、大体同じ様なものではないかと思えます。本当に学びたいものがその大学にあり、そこに行けば目的に叶う勉強ができ、真剣に勉強や研究に取り組んでいる大勢の仲間や素晴らしい指導者がいるような魅力ある大学ならば、少々の困難はあっても、優秀な外国の大学生も留学してくる筈です。

明治時代に日本が医学や法律など、学ぶべき事が沢山あった外国にどんどん出かけてゆき、しっかりと学んできたように、必要と魅力があればそこがどんなに遠くて行きにくい所であっても、意欲ある人は集まって来るものです。

本来の姿に戻そう

日本は本当に病んでいるという気がします。

料理屋がお客さんを集める為には、何をさておいても美味しい料理を作る研究や工夫が大切であるのと同様、日本の大学が優秀な学



生を集め、育てなければ、まず自分達日本の子どもへ目を向けるべきです。それまでの勉強の仕方や人間教育のあり方を根本から見直し、日本の子供の力を付ける事を考える事こそが重要な事です。勿論大学自体にそれだけの魅力がなければならず、指導者の質も問われているのです。

本来、学ぶという事はとても楽しい事のはずです。何故なら一つの事を深く学ぶ事によって自分の生きる世界が広がり、それまで見えていなかった新しい世界が立体的に生き生きと見えてくるからです。どこの国でもそうだと思いますが、小さい子供が、外の世界に興味を持つ様になると、「どうして?」「どうして?」と聞きまくり、大人を閉口させるといふ話はよく聞きます。

物事の成り立ちを知りたいという欲望は、人間なら誰でも生まれつき持っている欲望です。ふと不思議に感じた事や疑問に思ふ事を、なぜだろうと思つて親や身近な人に聞いたり学校で教わったりしてそれでも尚分からなければ、自分でその答えを探し出すように仕向ける事こそが、優秀な指導者のする事です。

本当の意味での勉強とは、あらゆる機会を通じて、物事の本質やそこに貫く法則や真理などを見出し、世界を見る自分の目を広げ、そこで得たものを基にして、より良い世界を造る為に貢献し、社会に還元していく為のものではないかと思えます。

知りたい事を知る為には、場合によっては外国の事情や文献を調べる必要も出て来るでしょう。その為に外国語を学ぶ必要も出て来るかもしれません。太極拳を学ぶ人が、必要に迫られ中国語を学び、医師を目指す人が、医学の進んでいたドイツの国の語学を学ぶ必要があったようにです。

人生はレッスンとテストの連続

勉強というと、一般的には受験の為の勉強や、資格試験の為の勉強などを想像しますが、そういう勉強だけが勉強ではありません。むしろそういう類の勉強ではなく、もう一つ別の側面の勉強が私達

には科せられています。それは、自分の人生の中で次々と生まれてくる問題や疑問を、どう解いていくかという事です。こちらの方の勉強は、受験のための勉強と違って、一瞬一瞬がレッスンでありテストの連続状態です。ですから私達は誰でも死ぬまで勉強の連続なのです。

人生で起きて来る問題は、その人にとっての悩みや苦しみという形となつて現れてきます。問題が起きた時は、どんな場合であつても、自分が変わる事を求められているという事です。ですからその問題を解決する為に、他人を変えようとする努力する必要がありますありません。

原因を自分の中に求め、何か今までの自分の生き方や考え方の中に、自然の法則に沿わないものがあると考える事です。心を落ち着け、何が問題なのかをしっかりと見極めなければ、正しい解決法は見つかりません。先の例で言えば、日本の子ども達が疲れ切つて勉強できない状態になつており、その為に大学のレベルも落ちてきているのに、その子供の事を放つておいて、外国の優秀な学生を呼び込み、大学のレベルを上げようなどしても、何ら根本的な解決にはならないのと同じです。日本の子供をしっかりと育てる事こそが、問題解決の方法なのです。子供をしっかりと育てるという事は、子供の責任でなく、それは大人の責任です。問題は私達大人が作った今の社会の中にあるのです。

教育の問題に限らず、何ごとにおいてそうですが、問題が生じた時、それに対し摂理に従つた正しい対処の仕方をすれば、同じ様な問題は二度と起きてこなくなる筈です。いよいよ事態が悪化したり、繰り返し何度も似た様な問題が起きる様な場合は、その解決方法はどこか自然の摂理を無視した、間違つた解決法だという事がいえま

摂理の中に生きる 本当の自分

さて勉強といえば、平井先生の人生も勉強に明け暮れる人生でした。子供の頃罹つた病気によって心臓を冒され、なぜこんな病気になるのかと考え続ける日々でした。手術を受けて小康状態を得た



後、ある大手家電メーカーの営業所に就職し、如何にして多くの品物売るかを考え工夫し、要は勉強し続け、従来では考えられない新しい売り方を発案し、売り上げ日本一を達成したのです。受け持ちのエリアは本当に小さな区域でしたが、その中で軒並み洗濯機や冷蔵庫などの電気器具を購入させる事に成功したのです。要は如何にして自分も相手も喜べるかを考え続け、如何にして両者が多くの利益を得る事ができるかを考え続けたのです。その後、その頃培つた方法で別の業種で独立してからも、その会社を優良企業に育て上げたのでした。平井先生の勉強は、そういう企業経営の方面だけでなく、体や心の健康、神仏の存在などの深いところまで進んでいきました。そして自分というのは、こういう肉体をもつた自分だけが自分なのではなく、生死を越えて生き続けているものである事を発見し、神仏と一体の自分と出会われたのです。

正しい問題の解決法は、いついかなる場合であっても、問題の答えを自分の内に求め続ける事です。問題が起きるといふ事は、問題を持ったその人自身が、あるいはその家庭が、その学校が、その社会が、国が、どこか自然の摂理に沿わないやり方をしていたという事です。問題の本質を見極め、自然の摂理に沿うように訂正することで、必ず正しい道が開けてくるのです。

問題が起きた時は基本に立ち戻る事です。例えば先の例で言えば、小さな子どもはしっかりと遊ばせ、学ぶべき大学生は、しっかりと勉強させるという事です。

自然の摂理は常に、善因善果、悪因果です。原因にふさわしい結果が、いつもここに現れているのです。

【ご案内】

次回六月は、六月九日(土)を予定しています

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

073-461-6300